



あなたが子どもの頃に抱いた夢は？ アスリートが子どもの頃に見ていた夢、そして夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストは、ウィルチェアーラグビー日本代表の若山英史選手です。

第14回

ウィルチェアーラグビー日本代表
わかやま ひでふみ
若山 英史選手

「やれることを自分で見つけていければまた道が拓けていく」

— ウィルチェアーラグビーはいつから？

若山 けがをしてから2年ぐらいたった頃ですね。静岡の伊東重度障害者センターと一緒に入所している人から車いすラグビーを題材にした「マダーボール」というドキュメンタリーがあるって紹介されて、そのDVDを見たんですね。その時の僕には全然想像できないような、激しいコンタクトもあって。プライベートな生活もすごく活発で、本当に楽しそうに生活しているなと思ったのがひとつのきっかけです。そのタイミングでデモンストレーションを生で見る機会があって。

— 気持ちよさそうぞうぞうって思う感じ、分かりますね。

若山 やっぱりそこですね。「おお！」って感情が自分の中にありました。

— 聞きにくいんですけど、けがのことを伺ってもいいですか？

若山 大丈夫ですよ。友達と遊んでいて、プールに飛び込んでプールの底に頭から。頸椎損傷は、交通事故より飛び込みの方が多いですよ。手術した後にドクターから「この先たぶん歩けるようになることはほとんどない」ということを聞くんです。19歳の時なんですけれど、一週間ぐらいいすかね、泣きました。すごく悲しかったですし、親にも申し訳なく思いました。2か月ぐら経ってから違うリハビリセンターに移るんですけど、そのリハビリの先生はそういう患者さんをいっぱい見てきている方なので、ズバンと「親の方が先に死ぬんだから、自分でやれることはすべてやらなきゃいけないんだから、しっかりここでやっていけ」と強く言われて、確かにそうだなと。そこからだんだんと、あれはできないけどこれはできるようになったなって、普通にやれることが増えると楽しいというか、後ろ向いてよくよしている暇なんてないって思えましたね。

— そうやってやれることを見つけていって、ひっくり返してみたいなのは、すごいなあ。

若山 やれることを自分で見つけていければ、また道が拓けていくので。

「僕らがブロックに入って道を作ってあげる」

— 実際に競技を始めてみて、見ていたのとは違いましたか？

若山 全然違いましたね。ラグビーというよりもアメフトに近いですね。前にボール投げるし、ボールに関係ない選手にタックルできる。一台150万円くらいする車いすで(笑)。



— それを惜しげもなくぶつけている(笑)。若山選手はどういうプレーをする選手なんでしょうか？

若山 僕は同じローポインターのクラスの中でもスピードがあるかな。今の日本代表のパターンとして、まず高さのある人間にボールを落として、そこからもう1人のエース、ダブルエースみたいな感じなんですけど、そのエースをとにかくフリーにさせてあげるために、僕らがいたりするんです。どうしてもハイポインターが目立ちがちですが、彼らだけでは止められてしまうところを、僕らがブロックに入って道を作ってあげるっていうのが主な役割なんです。

— つまり、若山さんが潰れ役としてスペースを作る。

若山 ローポインターが強いのはアメリカ、カナダなんです。ローポインターが相手のハイポインターを疲れさせ、ゲームメイクをする。きっとハイポインターが疲れて、まわりが見えなくなっても、ローポインターがしっかり落ち着いてゲームメイクできれば、それこそ頭よりも力のほ

う、車いすを漕ぐ方に力を配分できるんで、ローポインターがしっかり仕切ることが出来ればまたチームとしてぐっと強くなりますね。

— 深いなあ。

「いろんな競技が全部盛り上がっていくきっかけにはなったと思うので」

— 初めての海外での試合は？

若山 2011年。イギリスで開かれたGBカップです。

— これはすげーなっていうような驚きはありましたか？

若山 あいつら同じ障害者のレベルなのかと思いました。なにしろ速かったですし、強い。体格の差はもちろんあると思うんです、ただそれ以上に感じたのは海外の選手たちの試合にかけける気持ちでした。たとえば僕は1.0クラスなんですけど、正直、3.0クラスの選手を1対1で止めようと思ったら気持ちなんです。絶対負けないと気合入れて行く。アメリカとカナダの1.0の選手たちは、絶対止めてやるぞみたいな気持ちのまたさらに上の上くらいにいて。だから試合でも強い。ローポインターだけどハイポインター喰えないわけじゃないんだぜ、俺たちだって目立つんだって。

— 若山さんの目標としてすごい高いものを感じたんですね。あの長野オリパラの時に、スキーマの大日方邦子さんが言ってたんですけどね、「初めてサインしたよ、もう本当に列になってサイン求めてきてくれた」と。障害者スポーツっていうくりで言われてたんだけど、みんなアスリートとして見てもらえて、こうやって意識が変わっていったらって。次は2020年。

若山 メダルをとるとか自分の結果を出す為にまっすぐやっていく。もう障害者も健常者も関係ないんです。自分の時間使って、犠牲にして、結果求めていくってところでは、本当にみんながみんなすごいアスリートだと思うんです。リオで、準決勝で負けたとか、金メダルに届かなかったっていうのは正直言ってしまえば悔しかったことですが、東京でもっと盛り上がり、もっともっとパラスポーツやいろんな競技が全部盛り上がっていくきっかけにはなったと思うので…、それこそ自分たちの気持ちもさらに上の上にもっていかなければならないですね。

— やっつけて下さい。あいつら(笑)。

若山 やっつけます、あいつら(笑)。

PROFILE プロフィール

若山 英史(わかやま ひでふみ)選手

ウィルチェアーラグビー・日本代表。横浜義塾のヘッドコーチ兼選手。1985年1月3日生まれ。19歳の時、事故により車いすでの生活に。リハビリ施設でウィルチェアーラグビーを題材にした映画「マダーボール」に出会い、競技の世界に進む。ウィルチェアーラグビーは1チーム4人で行われ、障害の程度によって決められる点数の合計が8点以下のルールがある。若山選手は1.0点のローポインター(障害が重いほど点数が低くなる)として、体を張って相手を止めるディフェンスの役割を担う。パラリンピックには、2012年・2016年の2大会に出場し、リオデジャネイロパラリンピックでは日本チームの銅メダル獲得に貢献。

取材を終えて

若山英史選手はエネルギーがぎゅっと凝縮した印象だった。ウィルチェアーラグビーという、過激なコンタクトスポーツで日本代表を張るだけのことはある。熱い。自分の持っているものを全部ぶつけたいのだろう。リオパラリンピックも凄かったが、最高の舞台は2020年、東京だ！千載一遇というのか、若さがあり、経験があり、時の運と地の利がある一世一代の大会がやって来る。日の丸を上げてくれ。人生最高にしびれてくれ。

